

柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401/044-988-0004

<https://kakio-kyoudo.jp.org/>

第 203 号

古老は語る

宮野薫さんのお話 9

岡上の人々と戦後の暮らし（その 3）

(聞き手、筆録、コメント＝小関 和弘(柿生郷土史料館専門委員))

* 昔、秋頃か夕方になると蝙蝠こうもりが何匹も飛んで来た。小さな体で飛び回っていた。東光院の土手のところに横穴があって天井に一杯、蝙蝠がつる下がって居た。昼間には出てこないで、夕方になると出てくるのだった。

- ・東光院は岡上山東光院宝積寺と号し、奈良期の行基(668-749)に関わる開基伝承を有する。正面十間の本堂をはじめ、二層の山門や長屋門も有し、王禅寺と並ぶ多摩丘陵の二大本山とされた古刹である。他に瘡守社、蚕影社(川崎市立日本民家園へ移築)を包摂するように地域の信仰の拠り所である。10 に及ぶ末寺を有していた。平安期の作とされる兜跋毘沙門天立像とぼつびしやもんてんりゅうざう(川崎市重要歴史記念物)を祀る。



本堂側から見た東光院山門。一階部分に六地藏が祀られている。手前が子供たちの遊びの場となっていた。

信仰はもとより、地域の暮らしの拠り所でもあり、戦後の一時期には私設託児所も開設されていた。1947(昭和 22)年生まれの梶亨さんは東光院がテレビ時代劇のロケ地だったことや「境内で相撲や野球をするのが日課」だったことを回想している(『柿生の里の物語』日比谷出版社、2019 年)。1987(昭和 62)年までは境内で盆踊りが開かれた。

- ・岡上や鶴川周辺で蝙蝠に関する伝承や言い伝えがあったかを薫さんにお尋ねしたが、特にそうしたものはなかったとのこと。
- ・ちなみに近世、蝙蝠が山椒を好むとの俗言があって、夕暮れ時に蝙蝠が飛びかうのを見た子供たちが「こうもり来い、山椒食わしよ、柳の下で水飲ましよ」という俚謡を歌ったという。川柳集『俳風柳多留拾遺 卷一四 上』(1801(享和元)年)には「蝙蝠に山椒くはせるいい時分」の句が収載されている。

* 昭和 30 年頃迄、夕方になると田圃に蛍が一杯居て、竹箒を振り回すと 1 回で 5、6 匹捕れた。瓶に入れてウチに持って帰って、「蛍の光、窓の雪」で勉強したなんて言うからどんなもんかってやってみたが、本は読めなかった。まあ、よく見れば 1 字か 2 字は見えるけどね。

- ・一度に 5、6 匹捕れるほど、大量の蛍が飛び交っていたことに驚くが、岡上の子供だけが竹箒を振り回す豪快な蛍狩りをしていたわけではない。『町田の伝承／こどもの遊び』(町田市文化財保護審議会編、2000 年)にも「夕方になると、ほうきをもって蛍をとりに行った」とある。「蛍の光」を実験してみたという幼き日の薫さんの好奇心が微笑ましい。
- ・ホタルには「ゲンジボタル」「ヘイケボタル」などの種類がある。東日本のゲンジボタルは 4 秒間隔で明滅し、西日本の方は 2 秒間隔で明滅することが知られていたが「西日本から東京に導入したゲンジボタルは 2 秒型の発光周期を保持して」いる(鈴木浩文「国内外来種としてのホタルについて」(『生活と環境』2002 年 7 月))とのことで、薫さんが捕らえたのは西日本から導入以前の 4 秒型ゲンジボタルだったろう。
- ・柿生青年団岡上支部(岡上青年団)の会報『丘の上』1 号(1947 年 7 月)に山田三千代さんの「月光は淡く流れて消え光る／蛍の一つさみしかりけり」という短歌が、また複数作者の歌をまとめた「和歌」歌群のなかに「みつ子」名の「夕月夜誰か呼んでる心地して庭に出でれば蛍とびかふ」の短歌が見られる。48 年 1 月刊(奥付に「昭和 22 年」発行とあるが、複数の記事から昭和 23 年刊と判断できる)の 2 号から 4 年半の空白を有して刊行された 3 号(1952 年 6 月)には「輝治」名で「夜空晴れほたる飛びかふたんぼ道」の句が掲載されている。「輝治」は同号の「編集後記」を書く鳥海輝治さんのことと思われる。

みつ子さんと輝治さんの歌句には「とびかう」ほどたくさんさんの蛍がいたと詠われており、そうした蛍たちの「先祖」か「末裔」かが薫さんの竹箒の洗礼を受けたのである。

「輝治」さんの上掲句に続いて「夜は更けて原稿書く灯に虫がより」の句もあって、クーラーなどなかった時代に、涼を求めて開け放った深更近い窓辺の青年の姿と岡上の夏の暗闇とが浮かび上がる。

【前号記事の訂正】川井田地区のセエノカミの高さを「1m50 cm くらい」としたが、前号刊行直後に薫さんからお電話を頂き、1m50 cm は「やぐら」の直径だとのこと指摘をいただいた。筆者の聞き違いで、高さは 5m くらいあったそうである。

(続く)

シリーズ
禅寺丸柿の歴史 13

近代における川崎市域及び横浜市北部地域での果樹栽培(13)

相澤雅雄(都筑・橘樹研究会会員)

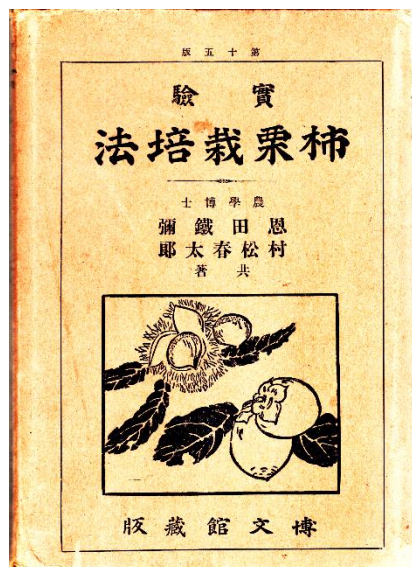
禅寺丸柿をとりあげた果樹園芸本を探す

近代における果樹園芸関係の本の中で、禅寺丸柿について詳しく解説した本は限られているようである。国立国会図書館及び全国の図書館・大学・公文書館等の所蔵資料が検索できる「国立国会図書館サーチ」を活用しても、その結果は芳しくない。あっても所蔵機関は限定されている。このため身近では、利用しにくい。大正～昭和初期に出版され重版した本も所蔵されていないのが現状であるといっても過言でない。

一方、多くの果樹栽培農家では、果たして関係図書を講求し、活用していたのであろうか。筆者は、各農家は代々にわたり果樹栽培の技術を親から子へと伝えていくか、あるいは親戚間での栽培方法の情報交換を通じて、品質向上につなげてきたものと推測する。おそらく、出版された果樹園芸関係の多くは、主に農事試験場及び大学の指導者や農業技術者、篤農家等が技術指導の際に活用していたものと考えている。

そこでこの現状を踏まえて、探し出した禅寺丸柿について解説している本を紹介するとともに、参考に供していただきたいと考える。ここに取り上げた各本は、全国の図書館での所蔵が限定され、中には所蔵本であっても貸出を禁止されているケースが多い。そこであえて各本の中の見出しを抄出しておいた。

- ① 農学博士恩田鉄弥・村松春太郎共著『^{おんだてつや}実験 柿栗栽培法』(博文館、大正元年初版、昭和 6 年 15 版)は、柿・栗の栽培者のために執筆したとする。項目として総論、語源由来及び分布、性態、気候及び土質、品種、繁殖、植付け、施肥、整枝及び剪定、摘果及び袋掛、中耕及び除草、採取、荷造運搬並びに販売、果実の貯蔵、病虫害について解説する。本書には禅寺丸柿の原産地は柿生村大字王禅寺であること。来歴については裏付ける記録がないこと。口碑によると、建保 2 年(1214)に王禅寺の中興開山である等海上人^{とうかい}が、本堂再建のため用材選択のため境内九十九谷の森林深く分け入った時に見事に紅熟した柿を発見し、試みに食べたところ甘美で、他の柿の比でないこと。上人は坊の園内に移植し、寺領の農民に栽培を奨励したこと。各自が間食としたこと。江戸時代に入って江戸に「丸柿」と称して売り出したこと。元禄の頃に王禅寺村から売り出した柿の呼称は、市場で競売する際に呼びにくい「王」をとり「禅寺丸」と呼ぶようにしたこと。都筑郡の風土に適した禅寺丸柿は、手間がかからず容易に栽培ができ、宅地や畑の周囲で栽培されていること。郡内いたるところで樹齢が 200 年ないし 500 年以上経過した老木を見ることができると。慶応～明治初年にかけては、一時期衰退したが、明治 6、7 年になり東京・横浜の人口が次第に増加したことにより、需要が高まったこと。その後需要が激増したこともあり、都筑郡での産額は、70 万貫(2,625 トン)にのぼり、価格は 10 万円以上と多大の産出となったことを記述している。凡例によると、果樹栽培は大いに進歩してきたが、しかし柿と栗について記述した本があることを聞かないため、本書が将来の柿・栗栽培の発達に貢献するところがあれば満足であると述べている。日本を代表した園芸学者が著した著作の一冊である。



おんだてつや・村松春太郎共著
『実験 柿栗栽培法』

- ② 富樫常治^{とがしつねじ}著『^{しょうかぼう}実験果樹園芸 中巻』(豪華房、大正 8 年初版、大正 15 年 7 版)は、果樹栽培の中でも柿・柑橘・栗の 3 種類に限って記述している。このことについて同書の凡例によると、この 3 種類に関する適切な著書が少なく、比較的なおざりにされている傾向にあると指摘している。本書には、果樹園芸上における柿の位置、来歴及び現況、風土及び地勢、品種、苗木の養成、栽植法、性態及び結果の習性、整枝法、剪定法、肥料、摘果及び袋覆、除草及び中耕、病虫害について詳述している。(続く)

シリーズ
歴史の中の女性像

その 1 ナイチンゲールの世界 (19)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

国勢調査の利用とインドへの眼差し

フローレンスが、ロンドンで開かれた国際統計会議で、統計学者としての力量を高く評価された翌年の 1861 年は、10 年に 1 回行われるイギリスの国勢調査の年でした。幸いなことに彼女の相談役となっていたファー博士が、国勢調査担当委員のアドバイザーに就任、事実上国勢調査の調査項目を洗い直す責任者となっていたのです。フローレンスにとって、願ってもないチャンスでした。彼女は、ファー博士に衛生問題を調査する項目を追加してほしいと要請しました。狙いは、軍事施設の衛生環境の改善と共に、市民生活を取り巻く生活環境をも改善することにあつたのです。住まいにおける 1 人 1 人の専有面積を巨大都市ロンドンだけでなく、全国の中小都市や農村にまで広げて調査できれば、1 人当たりの居住空間占有率と個々人の健康の間に、密接な関係があることを明らかにできるのではないかと考えていたのです。病人や健康の優れない人の数を調べ、家屋の状況と結び合わせれば、因果関係を明らかにできる。調査が実施できれば、衛生状態の改善を優先すべき地域を、全国規模で把握できると、彼女はファー博士に熱く訴えたのです。

しかし、フローレンスの熱心な訴えにも関わらず、1861 年の国勢調査には、居住環境の調査項目は反映されませんでした。地方の調査員たちの反発が強く、その人たちを説得するための時間的な余裕がなかったのです。識字率の低い地域では、調査員たちが訪問先で聞き取り調査を行い、代筆するケースが多かったため、調査を成功させるには、彼らを丁寧に説得することが欠かせなかったのです。フローレンスの念願だった住宅環境と健康の問題に関する調査は、次の 1871 年国勢調査には、しっかりと反映されました。統計学ばかりでなく、公衆衛生学の発達がフローレンスの主張を踏まえて、調査を徹底することを声高に要望してくれたことから、政府も要望を受け入れ、調査の充実に前向きになったのです。拡大する植民地からもたらされる莫大な利益が、極貧層の生活改善に予算を割くことを可能にしたことも大きかったのです。

イギリスで第 2 回の国勢調査が行われた 1861 年の 8 月、政界におけるフローレンスの最大の協力者だったシドニー・ハーバートが病に倒れ、治療の甲斐なく帰らぬ人となりました。彼はフローレンスの仕事を高く評価し、協力を惜しまない人物でした。ハーバートが倒れる前、2 人はインドで生活するイギリス人コロンと様々な階層に属する現地住民の居住面積や衛生状態を調査する計画を立て、ハーバートがイギリスのインド政庁の協力を取り付け、フローレンスが協力者と相談しながら質問票を作成、関係各所に送付したところだったのです。そうしたいきさつからフローレンスは、最大の協力者を失った悲しみに耐え、クリミア戦争の報告書に勝るとも劣らないしっかりした報告書を完成して、ハーバートの墓前に供えることが、彼に対する最大の供養と思い定めたのです。しばらくして、インド各地から質問票への回答が集まり始め、フローレンスは協力者たちと質問票の整理と分析に没頭、1 年以上の歳月をかけて、今回も 1 千ページに及ぶ報告書をまとめ上げたのです。当然多数の統計資料も添えられていました。

この報告書をまとめた後、フローレンスは公の席にほとんど顔を出さなくなります。1865 年、彼女はこれまでのホテル暮らしをやめ、サウス街 10 番地の屋敷に転居しました。クリミア戦争の戦地から帰ってほぼ 9 年が経っていました。この時期からのフローレンスについて、新聞記者たちは、「イングランドで最も会うことの難しい人物は、ヴィクトリア女王とミス・ナイチンゲールだ」と、異口同音に語りあつたと記されています。(続く)

〔追記〕 近代的な国勢調査は 1790 年のアメリカ合衆国に始まります。以後アメリカは 10 年毎に調査を実施します。19 世紀に入ると西欧諸国も国勢調査を実施するようになり、イングランドは 1851 年に第 1 回調査を行い、以後 10 年毎に実施するのです。やがて、アジアの国々にも広まり、日本は 1920 (大正 9) 年に最初の国勢調査を実施、以後 5 年毎に調査を実施しています。因みに 1920 年調査による日本の総人口は 55,963,053 人でした。



1925 (大正 14) 年国勢調査の宣伝ポスター

白鳥神社と神輿の今昔

その 1 少年の頃

柿生郷土史料館支援委員会副委員長 鈴木正視

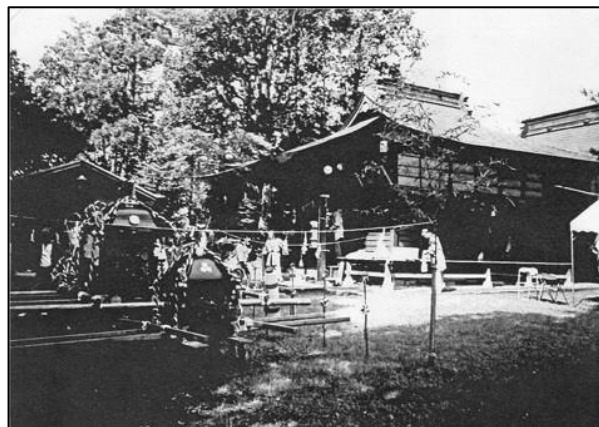
私が初めて神輿を担いだのは中学生の時でした。初体験でもあり「ぼくにも担げるかな」と不安でもあったが 1 人で担ぐわけではないのだからと、白鳥神社に行ったのを思い出す。

白鳥神社は、片平と五力田の神社。境内に着くと神輿は安置してある場所から出され綺麗に手直しされていた。神輿は誰が造ったのか神社に置いてあったが壊れていた。それを直し担ぎ出せるようにしたのが地元先輩の皆さん。「青友会」と云う組織をつくり活動していた。まだ五力田の人家が 17 軒の時代である。

重量がある神輿の出発の時間がきた。神社の境内の階段をゆっくり降ろし、2 本並んである大木（1 本は人間 3 人で巻く程太い）の横を通り鳥居の中を通り山道の道路へ、下り坂の道は、つるつると滑り重量のある神輿を担いで下りるのはたいへんであった。片平の本道へ出てから（当時は砂利道）は平らな道。警察の道路許可、東電の電柱使用許可（横断幕掲吊のため）が出されていた。そして途中から五力田へ。道はリヤカーが通れる程、その道を「ワッショイ、ワッショイ」と大きな声を出し担ぎ、田圃の狭い畦道へ。狭いので田んぼの中へ足が入り、ぬるぬると、田圃の次は山道の登り坂、より「ワッショイ、ワッショイ」と力が入った大きな声、そして鳥居が見えてきた。

その鳥居の前に一軒家が建っていた。河上徹太郎氏の家である。その別棟に大学生の書生が済んで居た。私は勉強を習いに通っていた。おしゃべりが多かったような気がする。

河上徹太郎氏は東京に住んでいたが昭和 20 年空襲の被害にあい、白洲次郎夫妻宅（鶴川）に約 2 年間居候させてもらい、その後片平の白鳥神社の鳥居の地区に家建てて住んで居た。趣味は猟銃のようで犬ポインターを連れて私の家の前を歩いているのをよく見かけた。当時は、小綬鶏、山鳩、雉子等たくさん居た。河上氏の奥様アヤさんはピアノを教えていて私の妹が習っていた。



白鳥神社の境内

柿生郷土史料館 第
98 回カルチャーセミナー

講師：菊地恒雄氏
(日本地名研究所事務局長)

日時：4 月 26 日(土)
13 時 30 分～15 時 30 分

会場：柿生郷土史料館
(柿生中学校内) 特別展示室

参加費：無料 どなたでも
参加できます。

治水と利水 ～麻生川・片平川と三沢川～

昨秋『再考二ヶ領用水』を上梓された、日本地名研究所の菊地恒雄先生をお迎えして多摩川と鶴見川に挟まれた地域の人々が、どのように河川と関わりながら生活してきたのか、川の恩恵を受けながらも、暴れ川の治水に悩まされてきた諸々をお話しいたします。

皆様ご承知の通り、柿生地域の河川は、表題にある麻生川・片平川だけでなく、真福寺川や早野川もやがて鶴見川に合流するのですが、黒川を流れる三沢川だけは分水嶺が異なり、暴れ川で知られた五反田川などと共に多摩川に合流します。菊地先生が、難しい内容をどのように整理して語ってくださるか楽しみにご参加ください。なお、講演の最後に先生の著書『再考二ヶ領用水』のサイン会を計画しています。著書は史料館で販売します。(売価 700 円)

柿生郷土史料館 開館日のご案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日 : 4 月 5 ・ 1 9 ・ 2 6 日 (土曜日)

5 月 1 1 ・ 1 8 日 (日曜日)

◎開館時間 : 午前 1 0 時～午後 3 時